

世かけて
びました

辺境草原都市

— 8月の旅行

中国・アジアに親近感を持つ
23名の和気あいあいの9日間であつた。

終戦70年、「満洲」経験者は減少一方である。今回、引揚経験者は7名であつた。何れも幼少期のことであつたが、体験者に加わり、同行メンバーにとつても厚みある旅となつた。

終戦70周年を迎え、かつての日本の満洲進出と破綻、日本民衆・現地民衆共にこうむつた苦難の跡を、我々が訪れ、歴史の明暗を理解し、逝きし日中両国民に祈りを献げ、後世に語り継ぐことが今回の目的である。

ホロンバイル草原

北西辺のハイラルはホロンバイル市の一つの区である。北京から空港着、世界四大自然草原であるこの草原をバスでハイラ

ルに向かう。

牧牛の群れの多さは想像以上。ここ内蒙古は、車窓から見るように、風力発電中国一、石炭生産で2位のエネルギー大省である。

関東軍の対ソ軍事拠点ハイラルの日本人ハイラル小学校は、現在、立派なハイラル文化街小学校であつた。日本側卒業生が建てた記念碑、緑化協力による「友情の木」があつた。守衛さんは快く校内見学を許した。

日ソ交戦のノモンハン事件（1939）戦跡を訪ねた。「ノモンハン戦役遺址陳列館」である。展示物は充実し、不便な場所なのに中国人観光客が結構来ていた。

関東軍の対ソ連前線要塞は東北に17か所あつたが、最大のものがここハイラル要塞で、その8000人が立てこもれる河南

台大規模地下壕が、「世界反ファシズム戦争ハイラル記念園」として公開され、観光客で賑わっている。

矢吹先生始め何人かが、分厚い高価な資料集を購入した。まじめな旅行団である。理解は真の親善につながる。

工事中死亡の建設労働者を、多数埋葬した砂地の一角が「沙山万人坑」で、完成後の口封じのために消された人々も含まれるという。2度目の記憶を頼りに探したが、道路工事の変化もあり、分ならず、草原に向かい手を合わせた。

満洲里市

「草原が続く北辺の地は見るものは少ないよ」とよく聞いた。

しかし北西の果て満洲里市はロシアと接し、交易都市として盛り上がる「国境の街」で、人口30万、市区7万の街並みも若く、2泊したかった土地だった。欧・亜文化が新たに出会う

地域と言え、「一帯一路」のスローガンにリアリティを感じた。国際列車線路と並行の国境ゲート参観の際、乾燥地に似合わない強烈な雨に遭つた。

ハルピン・チチハル

次に到着した歴史あるハルピンは200年来の中露交流の街である。

まず、731部隊跡地を見学した。新記念館の建設工事のため、構内を歩く形の案内で、化学・細菌兵器の動物・人体実験などの説明があつた。日本の団体が築いた平和記念碑前で焼香・黙祷した。

旅行団は後の2日間、ハルピン残留組、チチハル富裕県訪問組と、別行動した。

①チチハル組は・駅頭で富裕県女性の祝林業局長一同にお迎えいただき、富裕県の賓館で昼食の招待を受けた。林地とトウモロコシ畑の広大な平野を相対走つたかつての植林現

場は、洪水で流された一部を除きすっかり根付いている。

国際善隣協会が当時建てた記念碑を背に記念写真をとった。林業場に寄り、豊富な果物の接待を受けた。夕食会を答礼しなかったが、中央の綱紀肅正令の為か、ご遠慮された。逆に富裕県の銘白酒の土産を皆に頂戴した。

②ハルピン残留組は…名門ハルピン工業大学の日語科学生さんが案内役となり、キタイスカヤ通り・ソフィア教会を巡る一方、滕（トウ）教授の好意で大学教室でのディスカッションとなった。3学年開始の9月から佐賀・熊本・新潟・山形の国立大に1年間交換留学する学生さんが9名も居た。日本での再会が楽しみだ。

コーヒーを絶たれたまま着いたハルピンで、旧満鉄大和ホテルグリンで一杯に感激したのは、日本文学ご専門の渡邊先生だった。ロシアが建てた歴史1

00年を超す当ホテルは、日本の作家の足跡が多く、思いにふけていた。

ハルピンで、伊藤氏は別行動で母校の花園小学校を探し当て70年ぶりの姿を写真に収め思いを果たした。

引揚港葫蘆島

満洲引揚の集合港の葫蘆島市は、協会として4回目の訪問である。市・民間団体8名程の歓迎で、昼食招待を受けた。

「年々引揚体験者は減少する。記憶と友誼を永く伝える事業を考え実行しよう」。食卓で双方大賛成となった意見である。

昼食後、葫蘆島の旧「馬杖房駅」へ。次は乗船地に近く渤海湾を望む我々の植林場所へ。市側・協会側の記念碑は、緑樹と共に我々を迎えてくれた。賁（ベン）氏から、桜の植樹を増やしたいとの発言があった。帰路、程近い「茨山」という小高い路上で一時停車し、身の引き締まる説明があった。乗船を夢

にたどり着いた葫蘆島で力尽きた日本人が相当数あり「その方達を埋葬した場所がこの道路の下あたりです」。肅然として暫し黙祷した。

この向こうに「望海寺」という景勝の寺が見えた。予定にあったが今回は寄れなかった。

北京の旧友

最期の北京は専用バスで2日回った。景山公園から見下ろす故宮の全景は何回見ても感銘を受ける。改装なつてにぎわう歴史ある前門商店街は、計画がしっかり貫徹され感心する。

日本のシルバー技術者による技術支援、及び中国側研究・院生の日本短期視察の連絡口である科技部科技交流センターの魏先生、東京の大使館勤務を終え北京で過ごす旧友との会食など、我々市民・実務レベルの交流は、いつもの親しく打ち解けた雰囲気のものであった。

今回は旅行社企画旅行形式だったため、定番料理に飽きた

時など、適宜軽い麵で、或いは大学食堂で、の変更がしにくい9日間であった。

温水便座のあるホテルは一箇所だけだった。

街々に老百姓の現状と離れたバブリー現象が見えた。国内外飛行機は満杯、新幹線も満杯、上級レストラン等々、爆旅・爆買いである。祝福すべきことであらう。

旅行ガイドたちは嘆いていた。「東北旅行の日本人は減り、日本語ガイドは国内客の仕事をしています」「一方、日本に行く客のガイドが出てきました。日本はすごく人気が高いですよ」……。

阿部氏のプロ級の写真には今回も貢献いただいた。

地理・歴史・民族等々牛木さんのメモ家ぶりは相変わらずで、今旅行の正式記録は、俳人3名等も加わり期待される。（写真は表紙等を参照）

（村瀬 廣）